

熱きビー魂に燃えた全国のビーター諸君。我々はヨーヨーブランド「シュトルム・パンツァー」。2013年より、競技向けのハイエンドヨーヨーを世に送り出している。模型業界に例えるならば、ガレージキットの個人ディーラーのような立ち位置だと思えば分かりやすいだろう。なぜ今、アニメ版「爆球連発!! スーパービーターマン」(以下スパビー)を解説・論評する資料本を制作するに至ったかを、まえがきとしてお話ししたい。

筆者は「全日本ビーター選手権」をはじめとする、スーパービーターマンの公式大会で何度かの優勝・入賞経験がある。さらに戦績に応じて与えられる「等級バッジ」を集め、殿堂入りとも言えるべき「ゴールドマスター」に二度認定された。本書でライターとして協力してくれたニンジャボンは、当時の公式大会で知り合った旧知の仲である。2001年4月、筆者は高校生になり公式大会の出場資格を完全に失う。それは覚悟していたことだ。だが同時に、6月の次世代ワールドホビーフェアをもって二代目マスター攻略王は引退。月刊コロコロコミック12月号にて今賀俊先生のスパビーは連載終了。12月に最後の商品であるスマッシュフェニックスが発売し、スーパービーターマンシリーズは完全終了した。その後、「バトルビーターマン」「クラッシュビーターマン」「メタルビーターマン」「クロスファイタービーターマン」とシリーズは続き、2020年にはビーターマンの後継商品とも言える「ボトルマン」の商品展開が始まった。小学生お断りの季刊誌「コロコロアニキ」で今賀俊先生がスパビーとボトルマンのコラボ読み切り漫画を描かれたり、ボトルマンのデザインにスーパービーターマンを意識した部分も散見され、今後ビーターマンが復活する可能性もあるのかもしれない。

だが筆者とニンジャボンは、ビーターマンの復活を特別に望んでいるわけではない。私たちにとってビーターマンとはスーパービーターマンのことであり、Dr. タマノがいて、マスター攻略王がいて、甲高い声のMCのお姉さんがいて、毎月15日にはコロコロを買って今賀俊先生のスパビーを読む。それが私たちにとってのビーターマンであり、20年ほど前に既に終わったことなのだ。思い出として区切りを付けたい気持ちと同時に、不完全燃焼のまま志半ばでビーターマンが終わってしまったことへの未練も、また同時にある。

高校生になった筆者は「ヨーヨー」の世界の住人となり、数年後に一つのゴールを迎えた。1997年頃、コロコロ三種の神器と言えばミニ四駆、ビーターマン、ハイパーヨーヨーだろう。だがヨーヨーを「コロコロホビー」と分類することには抵抗がある。ハイパーヨーヨーはあくまでバンダイが販売するヨーヨーの商標にすぎず、ラインナップの多くは既存の海外製品を輸入したものである。バンダイと小学館の市場参入に関係無くヨーヨーの世界大会は行われている。個人がヨーヨーブランドを立ち上げることも近年では珍しくなく、ヨーヨーの世界に公式メーカーという概念は存在しない。そもそもヨーヨーは、始まりも終わりも全てを公式メーカーが一方的に決定する「コンテンツ」の類ではない。そのことは語気を強めて主張する。誰もが「オレが公式」になれて、ヨーヨーで遊びたい人が好きな時に好きなように遊べる環境が整いつつある。筆者はそれらの環境をもって「ヨーヨーは文化である」「ヨーヨーは文化になりつつある」と考えている。

※「あとがき」はニンジャボンの版と筆者版の両方があります。 そちらは実物の本をぜひ覧になつてくだらう。

アメリカの老舗ヨーヨーブランドであるダンカン社(ハイパーインペリアル等をバンダイに供給していた)がまもなく創業100周年を迎える。筆者が今ヨーヨーをしていられるのは、100年前の先人たちが敷いたレールの上を走っているからであり、過去ー現在ー未来が一本の線につながっている、つながろうとしているからこそヨーヨーに文化的価値を見出せる。そして筆者もまた次の世代のためにレールを敷かなければならず、ゆえにヨーヨーを墓場まで持つていくことを決意した。残された健康寿命と生涯賃金はせいぜい50年と1・5億程度。これらのリソースを最大限に活用するため、「自分にしかできないこと」に重きを置くようになった。

一方、ビーターマンは「文化」「文化になりつつある」のだろうか。当時のタカラ(現タカラトミー)のキヤッチコピーは「あそびは文化」だった。結論から言うと、筆者の理解ではビーターマンは文化として受け入れられるものではない。ビーターマンは一私企業の商標かつ商材であり、その私企業の都合、さじ加減で、世に出たり消えたりを何度も繰り返す。消える時にはこれまで応援してくれたビーターへの大したケアも何も無く、次に出した時にはこれまでの歴史はまるでなかったことかのよう扱われる。過去の情報を公式なアーカイブとして残すこともしない。ビーターマンを、おもちゃを真剣に愛し、青春を捧げる若者にとつて、これほど残酷なことはない。それがおもちゃの市場では至極当然のことだとしても、筆者の理解では文化としては受け入れられないのだ。ゆえにビーターマンも「競技玩具」や「バトルホビー」等と俗に呼ばれるこの世界は、筆者の居座るべき世界ではないことを悟った。ビーターマンを墓場まで持つていけない。であるから、筆者にしかできないビーターマンに関する何かを成し遂げ、多くのビーターたちの記憶に刻み、本書のような形のある資料として残り、潔く真の意味でビーターマンを卒業したいと思う。それはゴールドマスターに二度認定された筆者の使命である。ふと公式大会の表彰状を読み返すと、『これに満足せずマスター攻略王を倒すべく更なる努力を重ねてください』と書かれている。二代目マスター攻略王が引退した選手権の閉幕後、お別れに涙した筆者の頭をポンポンと撫でてくれたマスター。ごめん、マスター。俺はこの20年間、マスター攻略王を目指す努力を何もしてこなかった。そのかわりに、20年経った今、俺は俺のやり方で多くのビーターのビー魂にほんのわずかでも火をつけて、ビーターとしての人生を終えたいと思う。ゴールドマスターの称号は、殿堂入りとは、自分よりむしろ他人のビー魂に火をつけるために存在するのだと思う。

自分にしかできないことは何だろうかと考え、まず今回はアニメ版スパビー全20話と全登場機体を解説・論評する資料本を作ることにした。アニメ版スパビーの公式配信や円盤化が期待できない現状、せめて作品の存在と概要を一人でも多くのビーターに恒久的にお伝えしたい。時を同じくツイッターでは当時のビーター仲間が、元トップビーター・ニンジャボンとして、ビーターマン芸人かのごとく当時のおもしろなつかしいエピソードを語っていた。そのツイートの奥には、志半ばで終了したスーパービーターマンと全日本ビーター選手権への未練が、筆者の目には感じ取れた。ならばお互いビーターマンを卒業しないかと、本書のライターとしての参加を依頼し、引き受けていただけることになった。ニンジャボンのビー魂が、SNSという目に見える形で再燃していなければ、筆者のビー魂はまだ眠り続けていたことだろう。20年ほど前、最後まで互いにビー魂を燃やし合ったニンジャボン、並びにクマシエル、Picoraとの再会に感謝する。そして、さようなら。